

『南行集』考

湯 浅 陽 子

【要旨】

『南行集』は、北宋期の蘇洵とその二人の息子の蘇軾・蘇轍とが、北宋仁宗嘉祐四年（一〇五九）に、故郷の眉州眉山縣から首都汴京へ向かった旅の前半の、江陵までの船旅のなかで制作した詩文を集めている。『南行集』の体裁は、中唐期の白居易らを継承して北宋初期から編まれてきた、応酬詩集の形式を踏襲したものと考えることができる。蘇軾「南行前集叙」は、内面の自由な発露の結果としての文学表現を評価する態度を強調するが、これには、歐陽脩が「與樂秀才第一書」等で展開する、当時流行の詩風に対して、言葉をとくに用いて華やかに表現してはいるが、内側に充滿したものが十分ではないと批判する態度と類似のものである。また、彼等の旅する嘉州から峽州に至る各地は、少数民族と漢族との雑居地域もしくは異民族居住地域であり、漢族居住地域とは異なった風俗を持っている。蘇軾は当時の漢族の知識人が一般的に抱くような違和感を含んでそれらを観察しているが、「夜泊牛口」詩では、居住民の状況と対峙することを、かえって現在および今後の自分のあり方を振り返り、あるべき生き方を自問する契機として表現し、また「舟中聽大人彈琴」詩では、琴をその象徴的な対象として、知識人の正統の継承について考えている。なお、この『南行集』のなかで、蘇軾は先人の詩体を模倣する詩として「江上值雪、效歐陽體」詩を制作している。この詩は、歐陽脩「雪」詩の方法を模倣し、従来の詠「雪」詩の発想から脱した、新しい表現を模索しているが、歐陽脩がこのような方法による詩を多作しているわけではなく、蘇軾詩の言う「歐陽體」は、歐陽脩に固有の詩体という意味ではなく、歐陽脩の用いている方法・スタイルほどの意と思われる。さらに、峽州は、かつて歐陽脩が左遷されていた土地であり、この地で

の蘇軾は、当時の歐陽脩の作品を多分に意識して作詩している。特に「夷陵縣歐陽永叔至喜堂」詩では、歐陽脩に在任当時の詩文に描いていた様々なものの現況を報告し、彼に読まれることを意識していることがうかがわれる。蘇軾が詩中で峽州を粗野な土地として描かないのも、歐陽脩が当地に滞在したことがあるという理由によるものであろう。峽州での、歐陽脩を濃厚に意識するそれら諸々の作品は、この『南行集』全体が、歐陽脩が読むことを想定して編まれたものであることを示すものであり、それは「叙」で展開される文学観が歐陽脩らの発想を継承したものであること、また「倣歐陽體」詩を制作していることも、符合するものである。あるいはこの『南行集』は、親子の旅の報告として、彼に届けられたのではないだろうか。

はじめに

『南行集』は、蘇洵（一〇〇九—一〇六六）とその二人の息子の蘇軾（一〇三六—一一〇一）・蘇轍（一〇三九—一一二二）とが、妻・母程氏（四川省眉山縣）から首都汴京（現河南省開封市）へ向かった旅の前半の、江陵（現湖北省沙市市西方）までの船旅のなかで制作した詩文を集めたものである。孔凡禮氏『蘇軾年譜』卷三「嘉祐四年」、ならびに卷四「嘉祐五年」（中華書局 一九九八年）の考証によれば、父子は十月四日あるいは五日に眉州を出発し、長江を下って十二月初めに江陵に到着、

年が明けた正月五日に江陵を出発し、ここからは陸行して二月十五日に汴京に到着したとされている。『南行集』に付された「叙」の末尾には「時十二月八日江陵驛書。」の記述があるので、同集に収録された詩文は、嘉祐四年の十月から十二月にかけての二ヵ月間に制作されたものということになる。

多くの宋代詩文のなかでも、特に蘇軾の詩文については、長い年月にわたり、歴代の注釈者・研究者によって多くの検討が積み重ねられて来たが、その詩文制作の最初期にあたる『南行集』については、検討の対象とされたことが比較的少ないように思われる。これは、この集に収められた詩の多くが、宋刊本の現存する『東坡集』の『前集』『後集』には収録されず、明代以降のテキストしか伝わらない『續集』あるいは『外集』に収められていること、また若年期の習作的な作品群と見なされたこと、あるいは名所詠を多く含む旅の記録であるため、特定のテーマに結びついていくような深い内容を持ちにくいこと、等の理由によるものではないかと思われる。しかし、その長い生涯を通じて詩文を制作し続けた蘇軾の文学の全体像を考えるためには、それが習作期の作品であるとしても、原初の詩文制作のありようについて検討することに意義がないわけではないだろう。『南行集』については、さまざまな側面から検討を進めることができるだろうが、ここでは、収録された蘇軾の作品の属性やその表現を手がかりとして、『南行集』という集の持つひとつの性格について考えてみたい。

一 『南行集』とその「叙」

元・脱脱等撰『宋史』巻二百八藝文志七集類別集類（中華書局本）に

著録される蘇軾の別集は、『前後集』七十卷、『奏議』十五卷、『補遺』三卷、『南征集』一卷、『詞』一卷、『南省說書』一卷、『應詔集』十卷、『内外制』十三卷、『別集』四十六卷、『黃州集』二卷、『續集』二卷、『和陶詩』四卷、『北歸集』六卷、『儋耳手澤』一卷、および『年譜』一卷（王宗稷編）である。ここからは、宋代においては、いわゆる『東坡七集』（『前集』四十卷、『後集』二十卷、『奏議』十五卷、『内制』十卷、『外制』三卷、『和陶詩』四卷、『應詔集』十卷）の他に、詩文集として『南征集』、『黃州集』、『北歸集』といった、ある特定の時期の作品のみを集めたテキストが存在し、全体としては、清の紀昀が『四庫全書總目提要』巻一百五十四で評しているように、「名目頗爲叢碎」（名目頗る叢碎爲り）という状態にあったことが窺われる。なお、劉尚榮氏が『東坡外集』雑考」の、二、『外集』淵源考述（蘇軾著作版本論叢 巴蜀書社 一九八八年）で「征」乃「行」字的形近而訛。「征」は「行」と形が近似しているので誤ったのであろう。」と説明されているように、ここで『南征集』と記されているものが、本稿で言う『南行集』であると考えてよいだろう。

この集の名称となっている「南行」、つまり南方への旅という言葉は、収録作品のなかでは、次に示す蘇轍「初發嘉州」詩（欒城集巻一 四部叢刊本 以下同）の末尾部分に現れている。

余今方南行 余 今 方に南行し
朝夕事鳴櫓 朝夕 鳴櫓を事とす
至楚不復留 楚に至れば復た留らず
上馬千里去 馬に上りて 千里去く
誰能居深山 誰か能く深山に居し
永與禽獸伍 永く禽獸と伍とならんや
此事誰是非 此の事 誰か是非せん

行行重回顧　行き行きて重ねて回顧せん

引用箇所一句目にある「南行」は、この旅が、最初は岷江を南方に向けて下るものの、その後は長江を下る東への移動を主とするにも関わらず、彼らがこの旅の全体を南への旅ととらえていることを示している。続く二句目から四句目では、途中の「楚」（長江中流の現湖北省一帯）までは船旅で、そこからは陸上を馬に乗って、彼方の汴京を目指すという旅程を説明している。この『南行集』に収められた蘇轍の詩には、説明的な表現が多く内容が散文的になりがちであるという傾向を指摘することができ、引用箇所のように、そのためにかえって作詩の背景や状況を教えてくれる場合もある。また、先に見た『宋史』藝文志に著録される『南征集』という書名ならば、場所がらから言って、『楚辭』屈原「離騷」（王逸『楚辭章句』）の「濟沅湘以南征兮、就重華而陳辭。」（沅湘を濟りて以て南征し、重華に就きて辭を陳ぬ。）を踏まえることになるだろう。

この『南行集』には、蘇軾による「南行前集叙」（東坡集卷二十四 古典研究會叢書 漢籍之部第十六卷 汲古書院 一九九一年）が付されている。蘇軾の、ある特定の時期の作品のみを集めた詩文集で、叙が伝わっているのはこの『南行集』のみである。なお、『東坡集』はこの叙の題を「南行前集叙」としているが、宋・郎曄選註『經進東坡文集事略』卷五十六（四部叢刊本）所収の同じ文章は、「江行唱和集叙」と題しており、『江行唱和集』という書名でも行われていた可能性がある。「江行唱和集」、つまり長江の旅での唱和集という書名ならば、北宋初期以降に編まれた、白体の李昉（九二五—九九六）・李至（九四七—一〇〇一）の『二李唱和集』（李昉「二李唱和集序」〔《全宋文》卷四十五 巴蜀書社 一九八八年）には、中唐期の劉禹錫・白居易の『劉白唱和集』への

言及がある。）、西崑体の楊億（九七四—一〇二〇）・錢惟演（九六二—一〇三四）・劉筠（九七一—一〇三二）らによる『西崑酬唱集』、及び嘉祐二年（一〇五七）の貢舉の際に歐陽脩ら担当官たちが唱和した『禮部唱和詩』などがあり、それらと同様の形式を用いたものであることを示すだろう。なお、蘇轍「次韻姚孝孫判官見還岐梁唱和詩集」詩（欒城集卷三）に「伯氏文章豈敢知、岐梁偶有往還詩。自憐兄力能兼弟、誰肯墳終不聽箴。」（伯氏の文章 豈に敢へて知らんや、岐梁 偶^{たまに} 往還詩有り。自ら憐む 兄の力の能く弟を兼ねるを、誰か墳終はりて箴を聴かざるを肯せん。）とあり、この『南行集』の唱和の二年後の嘉祐六年（一〇六六）から治平元年（一〇六四）の時期に、鳳翔府簽書判官として岐州（北宋鳳翔府の唐代の名。現陝西省鳳翔縣）に在任していた蘇軾と、梁州（北宋汴京の古名。現河南省開封縣）に滞在していた蘇轍との間で応酬された詩文が、『岐梁唱和詩集』という書名で編集されていたことがわかる。このような状況から、この『南行集』の体裁は、中唐期の白居易らを継承して北宋初期から編まれてきた、応酬詩集という形式を踏襲したものと考えることができる。

またこの叙の題中の「前」という文字については、その示すところは明らかではない。あるいは汴京への旅の前半の江陵までの作品を集める、の意である可能性もあるのではないだろうか。しかし、別に『南行後集』の存在を示す資料は未見である。

では、次にこの「南行前集叙」の全文を見てみよう。

夫昔之爲文者、非能爲之爲工、乃不能不爲之爲工也。山川之有雲、草木之有華實、充滿勃鬱而見於外、夫雖欲無有其可得耶。自少聞家君之論文、以爲古之聖人有所不能自己而作者。故軾與弟轍爲文至多而未嘗敢有作文之意。己亥之歲、待行適楚、舟中無事、博奕飲酒非

所以爲閨門之歡、而山川之秀美、風俗之朴陋、賢人君子之遺跡、與凡耳目之所接者、雜然有觸於中、而發於咏歎。蓋家君之作與弟轍之文皆在、凡一百篇、謂之『南行集』。將以識一時之事、爲他日之所尋繹、且以爲得於談笑之間、而非勉強所爲之文也。時十二月八日江陵驛書。

夫れ昔の文を爲る者は、能く之を爲して工爲るに非ず、乃ち之を爲さざる能はずして工爲るなり。山川の雲有り、草木の華實有るは、充滿勃鬱として外に見はれ、夫れ其れ有ること無からんと欲すと雖も得べきや。少きより家君の文を論ずるを聞き、以爲く古の聖人は自ら已む能はざる所有りて作る者なりと。故に軾と弟轍と文を爲ること多きに至りて未だ嘗て敢へて作文の意有らず。己亥の歲、行に侍りて楚に適き、舟中無事にして、博奕飲酒は閨門の歡を爲す所以に非ず、而して山川の秀美、風俗の朴陋、賢人君子の遺跡、凡そ耳目の接する所の者と、雜然として中に觸るる有り、而して咏歎に發す。蓋し家君の作と弟轍の文と皆な在り、凡そ一百篇、之を『南行集』と謂ふ。將に一時の事を識るを以て、他日の尋繹する所と爲し、且つ以爲らく談笑の間に得、勉強して爲る所の文に非ざるなりと。時に十二月八日 江陵驛に書す。

収録作品数について、この「叙」には「凡一百篇」と記されているが、現存している詩文は、孔凡禮氏『蘇軾年譜』卷三の考証によって整理すると、蘇軾の詩四十四首（清・馮應榴『蘇文忠公詩合註』卷一 中文出版社 一九七九年 所収。以下では『合註』と略称する。）・賦二首（『東坡集』卷十九所収）、蘇轍の詩二十四首（うち二十二首は『樂城集』卷一所収。）・賦二首（『同』卷十七所収）、蘇洵の詩十首（曾棗莊・金成禮箋註『嘉祐集箋註』佚詩 上海古籍出版社 中國古典文學叢書 一

九九三年所収。）の、計八十二首であり、八割以上が現存していることになる。

この「叙」で展開される詩文論の眼目は、人の内面の充実の発露としての文章を、文章制作のあるべき姿として肯定し、自分たちの制作した詩文が、「勉強」（無理強い）して制作されたものではなく、そのような充実の自然な発露として生まれたものであることを強調していることにあり、このような自然で自由な文章制作を理想とする考え方は、他に蘇軾「文説」（『經進東坡文集事略』卷五十七）の、自らの文章制作を、泉から湧き出す豊かな水にたとえる「吾文如萬斛泉源、不擇地而出、在平地滔滔汨汨、雖一日千里無難。」（吾が文は萬斛の泉源の如く、地を擇ばずして出で、平地に在りては滔滔汨汨として、一日千里と雖も難きこと無し。）等にも反映されており、蘇軾の生涯を通して継承されていくものと考えることができる。また、ここに示されるような、内面の自由な発露の結果としての文学表現を評価する態度には、歐陽脩が、たとえば「與樂秀才第一書」（居士外集卷十九 四部叢刊本）で「今之學者」の文章表現の態度に關して、

不務深講而篤信之、徒巧其詞以爲華、張其言以爲大。夫強爲則用力艱、用力艱則有限、有限則易竭。又其爲辭、不規模於前人、則必屈曲變態、以隨時俗之所好、鮮克自立。此其充於中者不足而莫自知其所守也。

深く講して之を篤く信ずるに務めず、徒に其の詞を巧みにして以て華を爲し、其の言を張りて以て大を爲す。夫れ強ひて爲せば則ち力を用ふること艱く、力を用ふること艱ければ則ち限り有り、限り有れば則ち竭き易し。又た其の辭を爲すに、前人に規模せず、則ち必ず屈曲變態して、以て時俗の好む所に隨ひ、克く自立すること鮮な

し。此れ其の中に充てる者足らずして自ら其の守る所を知ること莫きなり。

と、その言葉をたくみに用いて華やかに表現し、時代の風俗を追いかけるばかりで自立することが少なく、内側に充滿したものが十分ではなく、自分の守るものが分らない有様を批判する態度との近似を認めることができるだろう。蘇軾がこの「叙」で自分たちの詩文制作が、「勉強」によるものではなく、内面の自由な発露の結果生れたものであることを強調するのは、当時のそのような新しい思潮を踏まえたものと考えることができる。

二 嘉州から萬州までの詩作

眉州を出発した父子は、岷江・長江を下流へと航行し、嘉州・戎州・瀘州・渝州・恭州・涪州・忠州・萬州・夔州・歸州・峽州を経て、江陵府へ向かった。ここで、彼らが航行した土地がどのような所であったのかを確認しておこう。この旅より前に成立していた樂史（九三〇—一〇〇七）『太平寰宇記』（中華書局 中國古代地理總志叢刊 王文楚等點校 二〇〇七年）の記述によると、彼等の故郷である眉州については、卷七十四「劍南西道三 眉州」に、風俗については、「同成都府。」と記されており、また「土産」（特産品）として「麤金（砂金）・秣米・茶」が挙げられている。また、この旅より後の元豐三年（一〇八〇）成立の王存（生卒年未詳）『元豐九域志』（中華書局 中國古代地理總志叢刊 王文楚・魏嵩山點校 一九八四年）卷七「成都府路」は、「上、眉州、通義郡、防禦。（至道二年升防禦。治眉山縣。）」と記し、また彼等の出身地である眉山縣については、「望」縣としていたので、北宋中期の眉山

及び眉山縣は、上州・望縣に格付けされる豊かな土地であったことがわかる。蘇洵父子が慣れ親しんでいた故郷の環境は、それなりに豊かで落ち着いたものだったのだろう。

また、樂史『太平寰宇記』は、父子が通過した諸地の風俗について、次のように記している。すべての土地を挙げると資料が大量になるので、以下では特徴的な記述のいくつかを示すことにする。

州民與夷獠錯居、華人其風尚侈、其俗好文。夷人椎髻跣足、短衣左衽、酷信鬼神、以竹木爲樓居、禮義不能化、法律不能拘。

州民夷獠と錯居し、華人 其の風 侈を尚び、其の俗 文を好む。夷人 椎髻跣足にして、短衣左衽し、酷だ鬼神を信じ、竹木を以て樓居を爲し、禮義も化する能はず、法律も拘する能はず。

（卷七十四 劍南西道三 嘉州）

其土有四族。黎・蒯・虞・牟。夷夏雜居、風俗各異。其蠻獠之類、不識文字、不知禮教、言語不通、嗜慾不同。椎髻跣足、鑿齒穿耳、衣緋布・羊皮・莎草、以鬼神爲徵驗、以殺傷爲戲笑。少壯爲上、衰老爲下、男女無別、山岡是居。

其の土 四族有り。黎・蒯・虞・牟なり。夷夏雜居し、風俗各おの異にす。其の蠻獠の類は、文字を識らず、禮教を知らず、言語通ぜず、嗜慾 同じからず。椎髻跣足にして、鑿齒穿耳し、緋布・羊皮・莎草を衣とし、鬼神を以て徵驗と爲し、殺傷を以て戲笑と爲す。少壯を上と爲し、衰老を下と爲し、男女 別くること無く、山岡はれ居なり。

（卷七十九 劍南西道八 戎州）

地無桑麻、每歲畛田、刀耕火種。其夷獠則與漢不同、性多獷戾而又

好淫祠、巢居巖谷、因險憑高、著班布、擊銅鼓、弄鞘刀。男則露髻跣足、女則椎髻橫裙。夫亡、婦不歸家、葬之崖穴。刻木爲契、刺血爲信、銜冤則累代相酬、乏用則鬻賣男女。其習俗如此。

地に桑麻無く、毎歲畝田するに、刀耕火種す。其れ夷獠なれば則ち漢と同じからず、性獷戾多くして又た淫祠を好み、巖谷に巢居するに、險しきに因り高きに憑り、班布を著け、銅鼓を撃ち、鞘刀を弄す。男なれば則ち露髻跣足し、女なれば則ち椎髻橫裙す。夫亡するに、婦家に歸らず、之を崖穴に葬す。木を刻みて契と爲し、血を刺して信と爲し、冤を銜すれば則ち累代相ひ酬い、用を乏しくすれば則ち男女を鬻ぐ。其の習俗 此くの如し。

（卷八十八 劍南東道七 瀘州）

これらの記述からは、嘉州（現四川省樂山市）・戎州（現四川省宜賓市）においては、少数民族と漢族とが雜居する状態にあり、異民族（夷獠）居住地帯である瀘州を含めて、漢族以外の人々は文字や儒教の礼教を知らず、言語は通じず、嗜好や身なり、また宗教、社会の倫理や価値観も漢族のものとは大いに異なる状態にあったことがうかがわれる。

また、夔州（現四川省奉節縣）・歸州（現湖北省秭歸縣）の風俗について、『太平寰宇記』卷一百四十八「山南東道七」の「夔州」「歸州」は、いずれも「同峽州。」と記し、「峽州」の風俗については、

楚之俗、剽悍巧猾。『管子』曰、「水弱而清、其民輕果而好詐」是也。士女事麻楮、不事蠶桑、男子刀耕火種、不知文學。其信巫鬼、重淫祀、與蜀同風。

楚の俗、剽悍巧猾たり。『管子』に、「水弱くして清く、其の民果を輕んじて詐を好む」と曰ふは是れなり。士女麻楮を事とし、蠶桑を事とせず、男子は刀耕火種し、文學を知らず。其れ巫鬼を信

じ、淫祀を重んじ、蜀と風を同じくす。

（卷一百四十七 山南東道六 峽州）

と記している。『太平寰宇記』のこれらの記述からは、嘉州から峽州に至る各地が、少数民族と漢族との雜居地域もしくは異民族居住地域であり、漢族の居住地域とは異なった風俗を持っていた状況をとらえることができる。

ではこのような各地の風俗に対して、彼らはどのように反応しているのだろうか。例として、蘇軾が戎州牛口（現四川省宜賓市付近）で制作した「夜泊牛口」詩（夜牛口に泊す（合註卷一））を見てみよう。

日落紅霧生 日落 紅霧生じ

繫舟宿牛口 舟を繋ぎて牛口に宿る

居民偶相聚 居民 偶して相ひ聚まり

三四依古柳 三四 古柳に依る

負薪出深谷 薪を負ひて深谷より出で

見客喜且售 客を見て喜び且つ售る

煮蔬爲夜飧 蔬を煮て夜飧を爲し

安識肉與酒 安んぞ肉と酒とを識らんや

朔風吹茅屋 朔風 茅屋を吹き

破壁見星斗 破壁 星斗を見る

兒女自咿嚶 兒女 自ら咿嚶し

亦足樂且久 亦た樂しみ且つ久しくするに足る

人生本無事 人生 本と無事なるに

苦爲世味誘 苦だ世味の誘ふところと爲る

富貴耀吾前 富貴 吾が前に耀き

貧賤獨難守 貧賤 獨り守ること難きのみ

誰知深山子 誰か知らん 深山の子の

甘與麋鹿友 麋鹿と友となるに甘んずるを

置身落蠻荒 置身 蠻荒に落つるも

生意不自陋 生意 自ら陋ならず

今予獨何者 今 予 獨り何者なるのみ

汲汲強奔走 汲汲として強ひて奔走す

日没とともに生じる赤い霧の中、停泊した船を目当てに、薪を売りつけようと居住民が集まってくる。彼らは肉や酒のない野菜ばかりの食事ととり、北風が吹き込む粗末なかやぶきの家に住んでいる。詩の前半では、「蠻荒」、つまり野蛮な未開の土地の居住民たちの貧しい生活が観察され描写されていく。このような記述の内容は、彼らに対する蘇軾の視線が、当時の漢族の知識人が一般的に持っていた違和感を含んでいることがわかる。同様の視点は、蘇轍「過宜賓見夷中亂山」詩（欒城集卷一）にも、「江流日益深、民語漸已變。岸闊山盡平、連峯遠非漢。」（江流 日びに益ます深く、民語 漸く已に變ず。岸は闊く 山は盡く平らかにして、連峯遠くして漢に非ず。）と表現され、同じ題の蘇軾の詩「過宜賓見夷中亂山」（合註卷一「牢」字下に、「諸刻皆作中、查云譌。」（諸刻は皆な中に作る、查は譌なりと云ふ。）と註す。）でも、後半部において、

蠻荒誰復愛 蠻荒 誰か復た愛さん

穠秀安可適 穠秀 安んぞ適すべし

豈無避世士 豈に世を避くる士無からんや

高隱鍊精魄 高隱して 精魄を鍊る

誰能從之游 誰か能く之に従ひて游ばん

路有豺虎跡 路に豺虎の跡有り

と、この野蛮な未開の土地には、花盛りの時期であっても心地よさを感じ

ることはできないとし、さらに、この地に世を逃れて隠棲するすぐれた人物がいたとしても、従うことはできないと述べている。古い時代から一般的に中国の知識人は、漢族の伝統的文化に文明としての価値を認め、その他を野蛮なものと見なす傾向にあり、これらの詩の表現もそのような価値観の反映ととらえることができるが、ここで取り上げている蘇軾の「夜泊牛口」詩は、そのような違和感を述べることのみに終始していない。詩の後半部で無邪気にかたことを話す子どもたちの姿を捉えたところから見方は変化し、詩の末尾部分では、「南方の野蛮な未開の土地に身を落としても、生き生きとした心でいることはそれ自体、品性の卑しいものではない。」という結論に至っている。ここで作者が、「富貴は私の前で耀いている、貧賤を守っていることなど難しい。」と述べるのは、当時の彼が進士及第を果たし、これからいよいよ官界に飛び出そうという状況に置かれていたことを反映したものであり、当時の彼の自負や、あるいは、自分が成功を約束された立場にあると捉えていたことを示しているだろう。しかし彼は、「人生とは本来何事もないものであるのに、世の中のうま味にひどく誘われ」ているのではないかと自問し、さらに「休むこともなく無理やり奔走してい」く自分に対して、「今、わたしはいったい何者なのだろうか」と考えている。ここでは、彼らから見れば文化的ならざる当地の居住民の置かれている状況と対峙することが、違和感や優越感を掻き立てるのではなく、かえって現在および今後の自分のあり方を振り返り、あるべき生き方を自問する契機として表現されている。自分のあり方に対するこのような葛藤や不安は、作者がこれから人生の旅に出発しようとしている若者であるからこそ表出されやすいものと言えるだろう。

ここでは例として戎州で制作された幾篇かの詩を取り上げて検討した

が、既に見たように嘉州から峽州に至る各地は同じような異民族居住あるいは混住地域であり、これらの各地を航行中の蘇軾は、当地の居住民の風俗や置かれた状況と対比して、自分の置かれた立場や生き方についての考えをめぐらせていたと思われる。そのような葛藤を別の角度から表現したものとして、次の「舟中聽大人彈琴」詩（舟中 大人の琴を彈ずるを聽く（合註卷一））を挙げることができる。

彈琴江浦夜漏永	琴を江浦に彈ずるに夜漏永し
斂衽竊聽獨激昂	衽を斂めて 竊かに聽くに 獨り激昂するのみ
風松瀑布已清絕	風松 瀑布 已に清絶にして
更愛玉珮聲琅璫	更に愛す 玉珮の聲の琅璫たるを
自從鄭衛亂雅樂	鄭衛 雅樂を亂せしより
古器殘缺世已忘	古器 殘缺し 世は已に忘る
千家寥落獨琴在	千家寥落して獨り琴のみ在り
有如老仙不死閭興亡	老仙の死なずして興亡を閱するが如き有り
世人不容獨反古	世人 容れずして 獨り古に反き
強以新曲求鏗鏘	強ひて新曲を以て鏗鏘を求むるのみ
微音淡弄忽變轉	微音 淡弄するに忽ち變轉し
數聲浮脆如笙簧	數聲 浮脆して笙簧の如し
無情枯木今尚爾	無情の枯木 今 尚ほ爾り
何況古意墮渺茫	何ぞ況や古意の渺茫に墮つるをや
江空月出人響絶	江空 月出で 人響絶え
夜闌更請彈文王	夜闌にして更に文王を彈ずる請ふ

編年体の諸注は、この詩を「戎州」詩と「泊南牛口期任遵聖長官、到晚不及見、復來」詩の間に掲げており、戎州から瀘州南井口にかけて（現四川省宜賓市から瀘州市にかけて）の異民族居住地帯を航行中のあ

る夜、停泊地の水辺で蘇洵が琴を弾じたことに際して制作されたものと考えてよいだろう。ここで、襟を正して傾聴すると、風に吹かれる松や滝のように清絶であり、かつ帯び玉が触れ合うように繊細な音に、心を激しく動かされると表現されているのは、言うまでもなく、琴の音楽および演奏が、中国においては古代から知識人の嗜むにふさわしい正統なものとして位置づけられてきたからである。ここでは儒家の一般的認識に従い、古代の正統の音楽が鄭や衛によって乱された後は、古の良き楽器も楽曲も失われ世の中からはもう忘れられてしまい、今では墮落した状態にあると考えている。そのような現状にあるからこそ、よき正統の継承を意識に上らせるために、末尾で、父―儒家的正統の継承者と目されている―に、古代の正統を継承する曲と考えられる「文王」の、さらなる演奏が依頼されるのであろう。

すでに見たように、辺境の異民族居住地帯を航行中に制作された蘇軾の詩の中では、目にした風俗への違和感と、そこから触発された自分自身のあり方に対する葛藤が吐露されていた。諸テキスト・注釈が考証するように、このような作品とはほぼ同時にこの詩が制作されたとするならば、琴をその象徴的な対象として知識人の正統の継承について考えるこの詩は、彼等が辺境地帯の文明的ならざる風物を目にして得た違和感や葛藤のなかで、一層、正統な文化の継承者である、知識人としての自己のあり方を確認している、という状況を示すものではないだろうか。

さらに夔州（現四川省奉節縣）・歸州（現湖北省秭歸縣）に至ると、彼等を乗せた船は、いよいよ長江航行最大の難所である三峽（瞿塘峽・巫峽・西陵峽）を通ることになる。蘇軾が夔州・歸州で制作した作品は、「八陣碁」（合註卷一 以下同）・「諸葛鹽井」・「白帝廟」・「永安宮」・「過木樨觀」・「入峽」・「巫山」・「巫山廟上下數十里有烏鳶無數、取食於行舟

之上、舟人以神之故亦不敢害」・「神女廟」・「過巴東縣不泊、聞頗有萊公遺蹟」・「昭君村」・「新灘」・「新灘阻風」の諸詩、ならびに「灤瀕堆賦」(東坡集卷十九)・「屈原廟賦」(同)であり、蘇轍に、「八陣磧」(樂城集卷一 以下同)・「入峽」・「灤瀕堆」・「巫山廟」・「巫山廟烏」詩、ならびに「巫山賦」・「屈原廟賦」(樂城集卷十七)が、蘇洵に「題白帝廟」(嘉祐集箋註佚詩 以下同)・「神女廟」・「過木樨觀」詩が残されている。

この地では、長編の古詩や賦が多く作られているが、航行最大の難所とされてきた峽谷と、それを差し挟む急峻な山々、さらにはその中に点在する旧跡をいかに描くかが、それらの主眼となり、それまでのような風俗への違和感に対する葛藤は余り表現されなくなる。なお、この峽谷地帯で蘇軾・蘇轍が何度か賦の形式を用いているのは、屈原ならびに『楚辭』の伝統を意識するからだろう。紙幅の限りもあり、本稿ではこれらの作品について詳細に検討することは控えるが、一点だけ挙げるならば、瞿塘峽の入り口の江中にある巨大な岩盤である灤瀕堆を、それに衝突する水に焦点を絞って描くなど、従来の詩文が取り上げることの少なかった題材に着目していることは、特筆すべきであろう。

三 「倣歐陽體」詩

この『南行集』のなかで、蘇軾は先人の詩体を模倣する詩を一首だけ制作している。『南行集』が、習作期の作品を集めたものならば、他にも何人かの先人のスタイルに学び模倣する作品が残されていて、むしろよさそうに思われるが、少なくとも、現代まで伝わっている作品のなかには、先人の詩体を模倣する作品はこれのみである。

この詩は、二十韻四十句からなる長編の七言古詩、「江上值雪、效歐

陽體、限不以鹽玉鶴鷺絮蝶飛舞之類爲比、仍不使皓白潔素等字、次子由韻」詩(江上に雪に値ひて、歐陽體に效ひ、限るに鹽玉鶴鷺絮蝶飛舞の類を以て比と爲さず、仍ち皓白潔素等の字を使はしめず、子由の韻に次す)(合註卷一)であり、時系列によって作品を配列する、清・查慎公註・馮應榴註は「仙都山鹿」詩と「嚴顏碑」詩の間に、また王文誥註は、「仙都山鹿」詩と「屈原塔」詩の間に配列し、いずれも三峽に入る前の忠州(現四川省忠縣)での作としている。

詩題に示されているように、この詩は蘇轍(字子由)の原作に唱和したものだが、その詩はすでに佚し、現在の『樂城集』には収録されていない。なお、查慎公註によれば、蘇轍「次韻子瞻病中大雪」(樂城集卷一)の、「空」(「貨」に作るが、別本により改める。)記乗峽船、行意被摧判。溟濛覆洲渚、冷冽光照坐。我唱君實酬、馳騁不遑臥。」(空しく記ゆ 峽船に乗りて、行意 摧判せらるるを。溟濛として洲渚を覆ひ、冷冽として 光 坐を照らす。我 唱ひ 君 實に酬い、馳騁して臥すに遑あらず。)は、この時の応酬に言及したものであるという。長編の作品なので、ここではその冒頭の一部分のみを次に示す。

縮頸夜眠如凍龜	頸を縮めて夜眠り 凍れる龜の如し
雪來惟有客先知	雪ふり來たるに 惟だ客の先づ知る有るのみ
江邊曉起浩無際	江邊 曉に起くるに浩くして際無く
樹杪風多寒更吹	樹杪 風多くして寒は更に吹く
青山有似少年子	青山 少年子に似たる有り
一夕變盡滄浪髭	一夕にして變はり盡くす 滄浪の髭
方知陽氣在流水	方に陽氣の流水に在るを知り
沙上盈尺江無漸	沙上 尺を盈たして 江に漸無し

題一句ではまず、頸を縮めて夜眠るのは凍りついた龜のようだと、寒さ

に縮こまって眠る自分をいさかかユーモラスに描き、続いて、旅人として眺める雪の朝の情景を描いている。少年のようだった青い山は、一晩で真っ白なひげを蓄えた姿に変わってしまったが、それでも長江の水の中には、もう春の陽の氣が流れていることがわかる。ここに示した詩の表現は、寒い雪の朝の情景を描いて、そこに何かほの温かさを感じさせるようだ。詩題が示していたように、この詩の眼目は、詠「雪」詩の常套である、「鹽玉鶴驚絮蝶飛舞」また「皓白潔素」といった文字を用いた定型の発想や表現から脱した、新しい表現を模索することにあるが、ここに挙げた詩句の表現だけ見ても、作者自身の感覚を働かせ、身の回りの情景に取材した、独自性のある表現を試みていることがうかがわれる。

この詩の原作となった歐陽脩「雪」詩（居士外集卷四 四部叢刊本）は、十四韻二十八句からなる七言古詩であり、雪を詠じた詠物詩である。次にその冒頭部分を挙げよう。

新陽力微初破萼	新陽	力微かにして初めて萼を破り
客陰用壯猶相薄	客陰	用ふること壯んにして猶ほ相ひ薄る
朝寒稜稜風莫犯	朝寒稜稜	として風の犯す莫く
暮雪綏綏止還作	暮雪	綏綏として止みて還た作る
驅馳風雲初慘淡	風雲	を驅馳して初め慘淡たり
炫晃山川漸開廓	山川	を炫晃して漸く開廓たり
光芒可愛初日照	光芒	愛すべし 初日の照るを
潤澤終爲和氣爍	潤澤	終に和氣の爍たるを爲す

題下に付された自註に、「時在潁州作。玉月梨梅練白絮舞驚鶴銀等事、皆請勿用。」（時に潁州に在りて作る。玉月梨梅練絮白舞驚鶴銀等の事、皆用ひざるを請ふ。）とあり、知潁州であった皇祐二年（一〇五〇）の

作であることと、先に蘇軾の詩題に、「效歐陽體、限不以鹽玉鶴驚絮蝶飛舞之類爲比、仍不使皓白潔素等字、」とあったのが、具体的には歐陽脩のこの詩の指定した規定を意識したものであることがわかる。また、歐陽脩の詩の末尾部分には、「潁雖陋邦文士衆、巨筆人人把矛槩。自非我爲發其端、凍口何由開一噓。」（潁は陋邦と雖も文士衆く、巨筆 人人 矛槩を把む。自ら 我 爲に其の端を發するに非ざれば、凍口 何に 由りてか一噓を開かん。）とあり、潁州の宴席などの場で制作されたものであろう。

この詩は、対象となる物の名、「雪」字を二回使用しており（蘇軾の詩は一回のみ使用）、その点においては、一般的な詠物詩の作法から逸脱したものとなっている。ただ、用字を規定したのは、雪の描写に習用される語の使用を禁じ、新しいとらえ方や表現の仕方のアイデアを求めようとす意図によるものだろう。すでに見たように、蘇軾の「江上值雪」詩が模倣するのはこのような新奇なアイデアを用いた表現を試みることであるが、歐陽脩がこのような規定を掲げた詩を多作しているわけではないので、蘇軾詩の言う「歐陽體」は、歐陽脩に固有の詩体という意味ではなく、歐陽脩の用いている方法・スタイルほどの意ではないかと思われる。なお、蘇軾には、同様の趣向で制作した「聚星堂雪」詩（東坡後集卷一 『蘇詩佚注』影印 一九六五年 所収本）があるが、その叙には、制作の経緯が次のように記されている。

元祐六年十一月一日、禱雨張龍公、得小雪、與客會飲聚星堂。忽憶歐陽文忠公作守時、雪中約客賦詩、禁體物語、於艱難中特出奇麗。爾來四十餘年、莫有繼者。僕以老門生繼公後、雖不足追配先生、而賓客之美、殆不減當時、公之二子、又適在郡、故輒舉前令、各賦一篇。

元祐六年十一月一日、雨を張龍公に禱りて、小雪を得、客と與に聚星堂に會飲す。忽ち歐陽文忠公の守と作れる時、雪中に客と詩を賦すを約し、體物の語を禁じ、艱難中に於いて特に奇麗を出だす。爾來四十餘年、繼ぐ者有る莫し。僕 老門生なるを以て公の後を繼ぎ、先生に追配するに足らざると雖も、而るに賓客の美は、殆んど當時に減せず、公の二子、又た適たま郡に在り、故に輒ち前令を擧げ、各おの一篇を賦す。

この引からは、この時、潁州（現安徽省阜陽縣）という場所がらと、歐陽脩の息子が座中にいるということにより、特に歐陽脩の方法を模倣した作詩が行われたことがわかる。なお、歐陽脩「雪」詩の作詩法については、「爾來四十餘年、莫有繼者。」と記しており、このような作詩法が、「歐陽體」として一般的に認知され継承されていたわけではないことを示している。

しかし蘇軾がこのような作詩法を歐陽脩に特徴的なものとして認識するのは、他に理由が無いわけではない。歐陽脩『六一詩話』（『歷代詩話』中華書局 一九八一年 所収本）中では、宋初の詩僧たちの千篇一律の詩風を批判し、彼らと許洞との逸話として、

因會諸詩僧、分題出一紙、約曰、「不得犯此一字。」其字乃山・水・風・雲・竹・石・花・草・雪・霜・星・月・禽・鳥之類、于是諸僧皆闕筆。

諸詩僧と會するに因りて、題を分かち一紙を出し、約して曰く、「此の一字を犯すを得ざれ」と。其の字は乃ち山・水・風・雲・竹・石・花・草・雪・霜・星・月・禽・鳥の類なり、是に于いて諸僧は皆な筆を闕す。

と記しており、これは「雪」詩の作詩法と同種の発想によるものと考え

ることができる。このことについては、張志烈・馬德富・周裕鍇氏主編『蘇軾全集校注』（河北人民出版社 二〇一〇年）詩集校注卷一の蘇軾「江上值雪……」詩の附録でも指摘されているが、若年であった蘇軾と蘇轍が、彼等の座主（進士及第した禮部貢舉の主任官）である歐陽脩の志向する詩風の特徴として、対象のとらえ方、表現の仕方の新新奇奇さを追求するということを意識していた可能性はあるだろう。

四 峽州での詩作

ようやく峽谷から脱した一行は、峽州（現湖北省宜昌市周辺）の域内に入る。蘇軾がこの地で制作した詩のうち伝わっているものは、「黄牛廟」（合註卷一 以下同）・「蝦蟆培」・「出峽」・「遊三游洞」・「游洞之日、有亭吏乞詩、既爲留三絕句於洞之石壁、明日至峽州、吏又至、意若未足、乃復以此詩授之」・「寄題清溪寺」・「留題峽州甘泉寺」・「夷陵縣歐陽永叔至喜堂」の諸詩であり、蘇洵には「題三游洞石壁」詩（嘉祐集箋註佚詩）が、また蘇轍には、「三遊洞」詩（欒城集卷一）・「寄題清溪寺」詩（同）がある。

蘇軾が当地で詩を寄せた対象は、黄牛廟・蝦蟆培・三游洞・清溪寺・峽州甘泉寺・夷陵縣歐陽永叔至喜堂であるが、これらは必ずしも彼自身の自由な関心によって選択されたものではないようだ。至喜堂に寄せた詩の題からも明らかであるように、この峽州は、かつて歐陽脩が、范仲淹の罷免に反対して高若訥に意見書を提出し左遷された土地である。彼は、景祐三年（一〇三六）十月に着任し、翌年の十二月に光化軍乾德縣（現湖北省均縣東南）令に移されるまでの一年余りの間、この地に滞在した。先に挙げた蘇軾がこの地で詩を寄せた対象は、当時歐陽脩が詩を

寄せたものと重なっており、この地での蘇軾の作詩が、歐陽脩の作品を多分に意識していることを示している。

さらに、歐陽脩「三遊洞」詩（居士集卷一 四部叢刊本）の題下には、次のような注が付されている。（大部分が項目を羅列する部分なので、訓読文は省く。）

一本作「夷陵九詠」。一「三游洞」、二「下牢溪」、三「蝦蟆碚」、四「勞停驛」、五「龍溪」、六「黃溪夜泊」、七「黃牛峽祠」、八「松門」、九「下牢津」。『居士集』本、古律各從其類、今從之。

この注は、これらの作品を「夷陵九詠」という連作詩として扱うテクストが存在したことを示しているが、蘇軾詩の題材のうち三游洞・蝦蟆碚・黃牛峽祠は、いずれもこのうちに含まれている。また現行の『居士集』は、卷一古詩に、「三游洞」・「下牢溪」・「蝦蟆碚」・「黃牛峽祠」を、卷十律詩に、「勞停驛」・「龍溪」・「黃溪夜泊」・「松門」・「下牢津」をそれぞれ収めており、蘇軾が、歐陽脩が古詩を制作した題材に詩を寄せていることがわかる。

また「夷陵九詠」に含まれないものについては、蘇轍の唱和詩がある「清溪寺」詩を除き、甘泉寺については歐陽脩にも「和丁寶臣遊甘泉寺」詩（居士集卷一）があり、また至喜堂については、歐陽脩に「夷陵縣至喜堂記」（同卷三十九）と「至喜堂北軒手植楠木呈元珍表臣」詩（同卷十一）がある。

次に、蘇軾のこれらの作品が歐陽脩の作品やその表現をどのように意識して詩を制作しているのかを、「蝦蟆碚」詩を例として検討したい。蝦蟆碚（「碚」は一に「碚」・「背」に作る。）については、南宋期の祝穆撰・祝洙増訂『新編方輿勝覽』卷二十九峽州（中華書局 中國古代地理總志叢刊 施和金點校 二〇〇三年）【山川】蝦蟆碚に、「在夷陵縣之

南。凡出蜀者、必酌水以瀹茗。陸羽第其品爲第四。」（夷陵縣の南に在り。凡そ蜀より出づる者、必ず水を酌みて以て茗を瀹す。陸羽 其の品を第して第四と爲す。）と記されている。

墓背似覆盂 墓背は覆へる盂の似く

墓頤似偃月 墓頤は偃月の似し

謂是月中墓 謂へらく是れ月中の墓にして

開口吐月液 口を開きて月液を吐くと

根源來甚遠 根源 來たること甚だ遠く

百尺蒼崖裂 百尺 蒼崖裂す

當時龍破山 當時 龍 山を破り

此水隨龍出 此水 龍に隨ひて出づ

入江江水濁 江に入りて江水濁り

猶作深碧色 猶ほ深碧の色を作す

稟受苦潔清 稟受 苦だ潔清にして

獨與凡水隔 獨り凡水と隔つのみ

豈惟煮茶好 豈に惟だ茶を煮るに好きのみならんや

釀酒應無敵 酒を釀すに 應に敵無かるべし

蘇軾「蝦蟆碚」詩（合註卷一）

石溜吐陰崖 石溜 陰崖より吐き

泉聲滿空谷 泉聲 空谷を滿たす

能邀弄泉客 能く弄泉の客を邀へ

繫舸留巖腹 舸を繫ぎて巖腹に留む

陰精分月窟 陰精 月窟を分かち

水味標茶錄 水味 茶錄に標さる

共約試春芽 共に約す春芽を試みると
檜旗幾時緑 檜旗 幾時か緑ならん

歐陽脩「蝦蟇碁」詩（居士集卷一）

歐陽脩の詩では、前半で水音が訪問者をひきつけるとを言い、さらに、がま蛙から連想して、この水が月の中の岩穴から湧き出た水だからこそ、茶録に取り上げられるのだとし、春の新茶を試してみたいと述べる。それに対して蘇軾の詩は、歐陽脩が直接には言及しなかったがま蛙に似た形態の面白さにまず着目し、そこから月へ、さらに歐陽脩も触れた月窟の水へと連想を繋いでいく。末尾ではやはり水質の良さに言及するが、歐陽脩が言及した茶のみならず、さらに酒の醸造にも好適だろうと対象をより広げており、詩のこのような内容からは、蘇軾が歐陽脩の詩を意識していることがうかがわれる。

ここでは「蝦蟇碁」詩を一例として挙げたが、峽州での蘇軾は、歐陽脩が当地で制作した詩文を意識して詩作していると考えることができ、このことは、この『南行集』という作品集の持つひとつの性格を暗示するのではないだろうか。『南行集』の持つ性格について、さらに蘇軾が峽州で歐陽脩ゆかりの至喜堂に寄せた、「夷陵縣歐陽永叔至喜堂」詩（合註卷一）から考えてみよう。

夷陵雖小邑 夷陵は小邑なりと雖も
自古控荆吳 古より荆吳に控ふ
形勢今無用 形勢 今 用ひらるる無く
英雄久已無 英雄 久しく已に無し
誰知有文伯 誰か知らん 文伯有り
遠謫自王都 遠謫さること 王都よりするを
人去年年改 人去りて年年改まり

堂傾歲歲扶 堂傾きて歳歳扶く
追思猶咎呂 追思するに猶ほ呂を咎し
感歎亦憐朱 感歎して亦た朱を憐む
（自註：時朱太守爲公築此堂。）

（時に朱太守 公の爲に此の堂を築く。）
舊種孤楠老 舊 種ゑし孤楠老い
新霜一橘枯 新たに霜して一橘枯る
清篇留峽洞 清篇 峽洞に留め
醉墨寫邦圖 醉墨 邦圖に寫す。

（自註：三遊洞有詩。『夷陵圖』後有公題處。
（三遊洞に詩有り。『夷陵圖』の後に公の題せし處有り。）

故老問行客 故老 行客に問へらく
長官今白鬚 長官は 今 白鬚なるかと
著書多念慮 書を著して念慮多く
許國減歡娛 國を許して歡娛を減らす
寄語公知否 語を寄するに 公は知るや否や
還須數倒壺 還た須らく數しば壺を倒すべし
冒頭では、古い時代には荆と吳に控える要地であったが、今では重視されることも立派な人物を排出することもなくなった夷陵に、意外にも当代の最高級の知識人（文伯）たる歐陽脩が左遷され、当時彼のために建造された至喜堂が、彼が去った後の年月の経過とともに、現在では傾いて修理を要する状態になっていると記している。このあたりの経緯は、清・查慎公の題下註が引く歐陽脩「夷陵縣至喜堂記」（居士集卷三十九）に記される、

某有罪來是邦、朱公於某有舊、且哀其以罪而來、爲至縣舍、擇其廳

事之東以作斯堂、度爲疏絜高明、而日居之以休其心。

某 罪有りて是の邦に來たるに、朱公 某に於いて舊有り、且つ其の罪を以て來たるを哀しみ、爲に縣舍に至るに、其の廳事の東を擇びて以て斯堂を作り、度して疏絜高明と爲し、而して日びに之に居せしめて以て其の心を休ましむ。

等の内容と対応するものである。

また続く部分では、かつて植えた一本楠が老木となり、今年降りた霜で橘の一本が枯れたと述べているが、これは歐陽脩「縣舍不種花惟栽楠木冬青茶竹之類因戲書七言四韻」詩（居士集卷十一）また、查慎公註の指摘する「至喜堂新開北軒手植楠木兩株走筆呈元珍表臣」詩（同）の詩題に現れる、県舍や至喜堂北軒に植えられた楠と、歐陽脩「初至夷陵答蘇子美見寄」詩（同）の「野簞抽夏笋、叢橘長春條。未臘梅先發、經霜葉不凋。」（野簞 夏笋を抽し、叢橘 春條を長くす。未だ臘ならざるに梅は先づ發き、霜を經るも葉は凋まず。）や、清・馮應榴註の指摘する「戲答元珍」詩（同）の「殘雪壓枝猶有橘、凍雷驚筍欲抽芽。」（殘雪 枝を壓して 猶ほ橘有り、凍雷 筍を驚かせて 芽を抽せんと欲す。）等に現れる橘を意識したものであろう。

続く部分では、かの「夷陵九詠」に含まれる「三遊洞」詩と、『夷陵圖』の後に残る歐陽脩の題跋に言及しており、この詩の全体が歐陽脩の夷陵時代の作品を意識したものであることを示している。さらに、詩の末尾で土地の古老からの歐陽脩の近況を尋ねる言葉を書き記すのは、この詩が歐陽脩に読まれることを意識してのものではないだろうか。つまりこの詩は、歐陽脩が在任当時の詩文に描いていた様々なものの現況を報告するものとなっていると考えることができる。

また、この詩を含む峽州で蘇軾が制作した詩の特色として注意すべき

なのは、それらがこの地を野蛮な土地として描かないことである。すでに見たように、蘇軾は戎州や忠州の風俗を違和感を感じさせる粗野なものとして表現しており、『太平寰宇記』の記述によれば峽州の風俗も、それらの土地と大きく異なるものではなかった。歐陽脩の場合は、例えば「寄梅聖俞」詩（居士集卷十一 題下に「一本注夷陵作」と注す。）では、「楚俗歲時多雜鬼、蠻鄉言語不通華。」（楚俗 歲時 雜鬼多く、蠻鄉 言語 華と通ぜず。）と、当地の風俗を中華と言語を通ぜぬ「蠻鄉」であると記している。しかし、蘇軾はこの峽州についてはその風俗の野蛮さを目にとめず、むしろこの「夷陵縣歐陽永叔至喜堂」詩の冒頭では、「夷陵雖小邑、自古控荆吳。」と、当地が古代には要地であり、その後は低迷期が続いたのだと記していた。さらにここに「文伯」たる歐陽脩が左遷されてきたことによって、一層の洗練がもたらされた、とも述べていた。つまり、ここで蘇軾が高く褒めているのは、歐陽脩という人の、洗練された文化性である。

『南行集』に収録されていたのが具体的にどの作品までなのかを確定することは困難だが、峽州での作品がこの集の後半部の多くを占めていることは明らかであろう。峽州での、歐陽脩を濃厚に意識するそれら諸々の作品は、この『南行集』全体が、歐陽脩が読むことを想定して編まれたものであることを示しているのではないだろうか。それはすでに見たように、「叙」で展開される文学観が歐陽脩らの発想を継承したものであったこと、「倣歐陽體」詩を制作していることとも、符合するだろう。晩年の歐陽脩が編んだ『六一詩話』は、蜀の人である蘇軾から、瀘州涪井監（現四川省洪縣）で購入した、「西南夷人」が梅堯臣の「春雪」詩を織り込んだ「蠻布弓衣」を贈られたと記しているが、あるいはこの『南行集』も、親子の旅の報告として、彼に届けられたのではないだろうか。